令和元年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　ぼくは災害１年生　」

広島県　呉市立広中央中学校　１年　相原（あいはら）　潤（じゅん）

2018 年７月、ぼくの住む広島県で大きな災害が起きた。「西日本豪雨災害」だ。

その雨が降った夜、いつもの雨より大きな雨音が響いた。窓から外を見ると、まるで灰色のカーテンが空から降りてくるように見えた。その雨はいつまでも降り続き、雨に飲み込まれそうな感覚がした。それは今までに経験したことのないような雨だったことをはっきり覚えている。

夜が明けて、その雨の力を知った。ぼくの住む地域の山は一部崩れ、その土砂が家のすぐ近くの道路まで流れてきていた。それは、見たことのない色の土だった。次の瞬間、この色は、絵の具の黄土色だ。と思った。山が崩れ、普段見ることのない山の中の土がおがされて流れ出たのだ。この黄土色をそれからしばらく見続けることになると、その時にはまだ思ってもいなかった。

この豪雨の本当のおそろしさを知ったのが、それからつけたテレビを観てからだった。山がくずれ、町は水につかっていた。多くの家屋が流され、つぶれてしまった。その後にテレビや新聞で被害者の数が報道され、行方不明者も数多くいることを知った。ぼくが生まれてから、これまでにも世界中で多くの災害が起きている。しかし、そのニュースを見ても、情報としてしかぼくの耳には入ってきていなかった。もちろん、その度に心を痛め、家族と「大変だね。」と話すこともあった。でもその時の感覚とは明らかに違うと感じていた。水がひいた後の黄土色の道路、町の姿が今でもはっきりと目に浮かぶ。

ぼくの近くでは、大きな被害はなかったが、その後の長期に渡る断水は生活を直撃した。しかし、ぼくは最初学校や習い事が休みとなり嬉しいと感じた。水をもらうのに何時間も並んだり、遠くの親せきが水や食料を持ってきてくれたりして、なんだか楽しいとさえ感じていた。水が出ないため調理できず、食事はパンやカップ麺などが続いた。それが続くと、母の手作りのごはんが食べたいと思うようになった。

しばらくして、ニュースで今回の被害について、明らかになったことが多くあった。死者は 200 人を超え、けがをした人も 400 人以上いた。全壊した住居が 6000 件以上。この数字を知り驚いた。雨はそんなに力を持っていたのか。人は雨に勝てないのか。と改めて感じた。その後も道を通るとあちこちの山が崩れ、遠くに見える青々とした山には細い黄土色の土砂でできた道が見られ、自然の恐ろしさを思い知った。それを見るたびに最初に感じた嬉しいや楽しいという気持ちを持っていた自分のことを情けないと思い、悔やんだ。

災害後、１年以上経ったが、今でも災害のつめあとは多く残っている。崩れた山の前に置かれている大きな土納袋や折れた木々。月日が流れ、乾き固まった黄土色の土がむき出しになっている。１年経ち、ぼくはずっと災害時、自分にできることは何か考えていた。災害時には、普段より多くの人に助けてもらった。水を給水所にもらいに行くと、自衛隊の方や呉市の方が励ましながら、水をくんでくれた。道路には普段見ることのない、県外の消防車や救急車、パトカーもいた。多くの方が助けて下さっていた。国境なき医師団は、被害のひどかった安浦にいちはやくかけつけ、けがをされている人たちの治療にあたっていた。その方たちの姿を見て、直接治療してもらったわけではないが何度も「ありがとう。」と心で思った。全国から数多くのボランティアの方も来られていて、復旧作業を手伝ってくださった。この方たちのように、災害時に何かできれば良いのだが、今のぼくには、まだできない。それでも、今のぼくにできること。それは、この災害で感じた気持ちを忘れないこと。また、これまで起きた災害は、どこか人事のように感じていたが、これからは、常に自分のこととしてとらえ、その時の自分に何ができるか真剣に考え、向き合い、行動に移していきたい。被災地で生活して初めて感じたことが多くあり、初めて真剣に考えた。ぼくは今、ようやく災害１年生だ。これから、災害と向きあえる自分に成長していきたい。